

無意識と記憶

— Saul Bellow の “Mosby’s Memoirs” —

入江 識 元

(平成7年10月12日受理)

要 旨

“Mosby’s Memoirs”における我々の課題はそのタイトルにもある「回想＝記憶」の機能について考察することである。この作品はモズビーの回想と現在の言説の交錯という形で成り立っている。メスカル酒の酔いによる言説の歪曲は、現在と回想を繋ぐベローの戦略である。そしてこのことは、我々が記憶の問題を考える際の糸口ともなる。時間が過ぎ去ること即ち過去は現在に起因するものであるが、記憶とはこの「過ぎ去る現在」としての過去と同一ではなく、純粋な過去の存在を構成するものであって、現在における過去の再現前化である。この意味で記憶とは心理的なものではなく、むしろ時間的なものである。一方、「無意識」に目を転じれば、ラストガーデンの回想への逃避や、ミトラの廃墟に関する彼の言説から、ナルシズムや死の欲動を読みとることができる。モズビーは自己の回想をラストガーデンのそれで偽装しながら、実は記憶を抹消しようとしていた。エロスが生を外へ向ける欲動であるとするれば、ナルシズムとは生を自己へ向ける欲動である。その意味でナルシストは本質的に死の欲動と手を結んでおり、ミトラの墓地のイマージュにこのことはよく表れている。

キーワード

時間と記憶、純粋過去、無意識、樹木と根茎、ナルシズムと死

1 イントロダクション

ソール・ベロー (Bellow, Saul) の作品には様々な巢穴が存在する。イデオロギーに彩られた巢穴。そして人称や話法に彩られた巢穴である。“Mosby’s Memoirs” は三人称で語られる。語るのはベローなのか。しかし様々な戸口でベローの語りはモズビー (Mosby) の語りへと変化してゆく。モズビーの博識はベローにとってひとつの武器だ。彼のイデオロギーを追いかけるうちに、我々は

言説の袋小路に迷い込むのである。これがベローの仕掛けた読者に対する罠であり、挑戦である。回想＝記憶の中の様々な言説（そしてしばしばそれは mescal 酒による変形を受けている）の絡みを解くこと。これが我々の課題である。ベローはアカデミズムを嫌いながら、それをユーモアや風刺、言説の彩りに変えてしまう。アカデミズムを用いながらアカデミズムから逃走の線を引くこと。これがベローのテクニクである。

本論文で我々が扱うのは、モズビーの記憶と言説に関するいくつかの哲学的問題である。

まず、古典的哲学—二元論と弁証法—からの逃走から始めて、記憶と時間に関する問題、自我を取り巻く諸問題、自我と無意識との相関性、そして死の問題である。また、本論は、ベローがデカルト (Descartes, René) とヘーゲル (Hegel, Georg Wilhelm Friedrich) を排除していることに由来し、結果としてニーチェ (Nietzsche, Friedrich Wilhelm), ベルクソン (Bergson, Henri) を、そしてその解説者としてドゥルーズ (Deleuze, Gilles) を援用することを了解事項とする。

2 デカルト及びヘーゲルから逃走の線を引くこと

この短編には二人の哲学者の名前がある。デカルトとヘーゲルがそれである。その名がどのように扱われるかでベロー自身の思想体系を知ることができる。

まず、デカルトに対する言及について見てみることにしたい。

But the French cannot identify originality in foreigners. That is the curse of an old civilization. It is a heavier planet. Its best minds must double their horsepower to overcome the gravitational field of tradition. Only a few will ever fly. To fly away from Descartes.*¹

ここに表現されているのはデカルトの呪縛から逃れられないフランス人に対する揶揄である。

一方、ヘーゲルへの言及のシーンはいささか面白い。「アメリカの詩人」アルフレッド・ラスキン (Alfred Ruskin) のエピソードがそれである。

His proof was from Hegel. According to Hegel, history was the history of

wars and revolutions. The United States had had only one revolution and very few wars. Therefore it was historically empty. Practically a vacuum.*²

この弁証法による歴史の説明はヘーゲルにおかされたラスキンに対するモズビーの揶揄を暗示する。この2つの揶揄は、デカルト、ヘーゲルから逃走の線を引こうとするベローの思惑を表していると言える。

デカルトやヘーゲルについての問題点を明らかにすることは、残念ながらこの論文の意図するところではない。しかしながら、本論文に関連する問題点について二、三指摘することは無駄ではないだろう。

デカルトの問題点は、偏にコギトについてである。「思考する自我」の存在は、そのまま無意識の自我を排除することとなっている。「私は思考する。だから私は存在する。」と彼は宣言する。この宣言が有効なのは「思考する自我」が前提となっているからである。それでは思考する私とはいったい誰か—人間とは何か、ではなく人間とは誰か—これが我々の抱える問題なのである。

A most peculiar, ingenious, hungry, aspiring, and heart-broken animal, who, by calling himself Man, thinks he can escape being **what he really is**. Not a matter of his **definition**, in the last analysis, but of his **being**.*³

(強調は筆者。以下同じ)

定義 (=意味) ではなく存在の問題。我々の問題とするのは前提のない未規定の存在としての人間である。「思考する自我」を我々が考える場合、実は、思考の前提条件である時間が無視されていることに我々は気づく。次章以下に述べるように、思考、記憶、意識の諸問題は時間の問題、或いはベルクソンの

言う「持続」の問題を宙づりにしては考えられないのである。

ヘーゲルにおける問題点は、我々が後に欲動理論を扱う際にも触れることになる、弁証法の根本的な欺きの問題と二元論による牢獄の問題である。デカルトにとって「時間」を「瞬間」にすり替えることが詐欺行為であるとすれば、ヘーゲルの詐欺行為はAufhebungによって一気に論理を飛躍させること*4、時間と存在の問題を二元論的定義の問題にすり替えることである。ヘーゲルにおける対立は克服を前提とした対立であり、和解されることになっている対立である。ヘーゲルの弁証法はそれ故、対立から矛盾、矛盾の解決へと向かう。神に対する反動的力を人間であるとするニーチェと違い*5、ヘーゲルは、神と人間との統一を結論とする。

デカルトにせよヘーゲルにせよ、必ず論理に「前提」が存在する。これら二人の哲学者の過ちから、我々が学ばねばならないのは次のことだろう。即ち、哲学は「前提」のないところで語られなくてはならない、ということである*6。

3 ^{メモワール}回想=記憶の問題 —— 現在は如何にして過ぎ去ることができるのか

モズビーの現在と回想=記憶。これがこの短編の構成である。これら2つの時間が構成する言説を紐解く前に、我々は前提として次の命題を解いておかななくてはならない。そもそも回想=記憶とは何か。ペローの引く交錯する時間軸。常識が我々に語るのは、回想=記憶とは過ぎ去ったことである、ということである。時間を持続という概念で捉えるのなら、我々の犯すひとつの誤謬は、時間とは瞬間の集合、無数の点の集合であると考えることである。我々が現在を、現存在を手中におさめるには、時間は瞬間の集まりであってはならない。もしそうならば、我々は常に存在し、常に消滅しなければならないからである。

従って、瞬間の持続は、時間を作り上げることはない。

Time is constituted only in the **originary synthesis** which operates on the **repetition** of instants. This synthesis contracts the successive independent instants into one another, thereby constituting the lived, or living, **present**. It is in this **present** that time is deployed. To it belong both the past and the future...*7

ドゥルーズによれば、過去の時間は過ぎ去る現在として構成される。これは多分にニーチェの問題である。過去は如何にして時間の中で構成され得るか。即ち、永遠回帰の宇宙論的問題。それでは、回想=記憶が過去であるとするれば、回想=記憶は過去が属するところの現在に属するののか。そうではなく、「過ぎ去る」は現在の要求であり、「過ぎ去らせる」のは時間の根拠であるところの回想=記憶なのだ。つまり、回想=記憶とは過ぎ去る現在としての過去（すなわち古い現在）ではなく「純粹過去」であり、「過去の存在を構成するもの（現在を過ぎ去らせるもの）」なのである。

回想=記憶とは古い現在の現実の現在の中での「表象=再現前化^{ルプレゼンタシオン}」である。過去は過ぎ去ることは決して無く、過ぎ去るのは現在の業ということである。

It [=the past] no longer **exists**, it does not **exist**, but it **insists**, it **consists**, it **is**. It **insists** with the former present, it **consists** with the new or present present. It is the in-itself of time as the final ground of the passage of time. In this sense it forms a pure, general, a *priori* element of all time.*8

これはドゥルーズがベルクソンとの対話の中で見いだしたものである。彼の論点は過去と現在の共存であり、「時間の基本的位置」に関するものである。

持続は本質的に記憶であり、意識であり、自由である。そして持続が意識であり自由であるのは、それがまず第一に記憶だからである。^{*9}

問題なのは、記憶とは空間的なものではなく、絶対的に時間的なものだけということである。持続の時間が存在しなければ、記憶も存在しない。

それでは、空間的ではない、とは如何なることか。それは、記憶内容はどこに保存されるのか、という問いと本質的に同じである。記憶内容は、空間的などどこかに、つまり、例えば脳のどこかに保存されるのであろうか。もしそうであれば、記憶内容と記憶機能であるところの脳は同一線上に並ぶはずである。ところが脳それ自体に記憶機能があれば、即ち、脳それ自体が記憶の受け皿たり得るのなら、脳は客観性の線上にあることになる。しかし、我々の記憶内容は我々の主観であり、両者が同一線上に並ぶことはない。それどころか、脳の存在それ自体は持続の中にある。「記憶内容はそれ自体で保存されるのだ。^{*10}」

4 歪められた過去としての回想＝記憶

Oaxacaで mescal 酒に酔いながら「回想＝記憶」を書くモズビー。mescal 酒はペローの戦略的機械である。モズビーの現存在と回想＝記憶を結び付けるための、という意味においてである。モズビーの回想＝記憶が、過ぎ去る現在としての過去ではないことは、モズビーがこの回想＝記憶に変更ないしは暴力を加えていることから理解される。

Maybe he had drunk too much mescal

at lunch(beer, also). Behind the green and red of Nature, dull black seemed to be thickly laid like mirror backing.^{*11}

この表現で我々は容易に二重構造を見て取ることができる。即ち、green, red のアクチュアルな現存在と、それを鏡に写ったファンタズムのように作り替える背景の black である。モズビーは mescal 酒を武器にアクチュアルな現存在と回想＝記憶の世界を結び付けた。つまり彼は過去を歪めたのであって、まさにそのことによって、モズビーの回想＝記憶は過ぎ去る現在ではなく純粹過去に変えられていることが証明されている。また、mescal 酒の影響で気分の優れないモズビーは現在の言説と回想＝記憶の言説を交錯させる。このことから2つの戦略が読み取れる。第1に、「純粹過去」であるところの回想＝記憶を現在に絡めることによって、モズビーの現存在に暴力を加えること。これはモズビーが現存在から免れようとする姿勢からも説明される。第2に、本来主要テーマであるはずのモズビーの現存在と過去の関係、副次的なハイメン・ラストガーデン (Hymen Lustgarten) の問題にすり替えていること。回想は古い現在の表象＝再現前化である以上、モズビーの回想はアクチュアルな現在であったものと差異が生じるはずである。

モズビーはいわゆる公平な語り手ではない。(もっとも言説それ自体は三人称の語りではあるが、モズビーは三人称で語ることによって視点を攪乱している。^{*12}) 彼が語るのはことごとく運に見放されたラストガーデンの姿である。彼に言わせれば、ラストガーデンはアナクロニズムの男である。それでは、失敗するごとに見せるラストガーデンのあの「笑い」は何を意味するのか。Fortuneへ行くことのないエスカレータに乗るラストガーデン^{*13}。が、彼の「笑い」はこれら全てのネガティブな証拠を一瞬にして帳消しにしてしま

う。実は、ラストガーデンに対する回想は仮りであって、重要なのはモズビーの自身の回想なのだ。

Mosby had evoked, to lighten the dense texture of his memoirs, a Lustgarten whose doom was this gaping comedy.*¹⁴

ラストガーデンの回想が comedy なら、モズビーのそれは tragedy である。如何なる逆境に立っても「笑い続ける」ラストガーデンはある意味では滑稽であり、グロテスクである。しかし、如何にぶざまであっても、「笑い」は彼に救いを与える。それに対し、モズビーのラストは滑稽どころか悲劇的であり、死のイメージに満ちている。ラストガーデンを嘲笑するモズビーの悲劇性を実は、ペロー自身が笑っているのかもしれない。

この短編のなかでのモズビーの目的地は Mitla の廃墟である。彼は宿の召使いに向かって “Yo mismo soy una ruina.*¹⁵” と言う。この自分自身を廃墟と同一化する冗談は、一瞬彼を comedy の側へ引き寄せる。しかし、これは彼にとって冗談ではなかった。彼は召使いに「あなたは廃墟ではない」と言ってほしかったのだ。この願望が召使いによってはぐらかされるというエピソードは、如何にモズビーが自分自身 comedy に対し鑑識眼を持っていると空想するにせよ、ラストガーデンにおける「笑い」による悲劇の comedy 化と実に対照的である。

モズビーの「廃墟」に比べて、ラストガーデンは「廃墟」ではなく、むしろ家庭ないしは家族を堅く保持している。

Mosby recognized that pride in his success was Lustgarten's **opiate**, his artificial paradise.*¹⁶

このラストガーデンの opiate (阿片剤)

はモズビーの mescal 酒を想起させる*¹⁷。しかしながら決定的に異なるのは、実際に飲酒をすることにより記憶を歪めるモズビーに対し、ラストガーデンを酔わせるのは自ら成し遂げた成功、人生は悲劇的であったが家族を守ったという意味での成功だったということだ。モズビーはこのことを認識していた。であるからこそモズビーはそれだけ悲劇的なのである。

5 無意識の構造 —— 記憶のオントロギー

This monument of vegetation, intricately and densely convolved, a green cypress, more than two thousand years old, **roots** in a vanished lake bottom, older than the religion of this little heap of white and gloom, this charming peasant church. In the comfortable dust, a dog slept. Disrespectful. But **unconscious**.*¹⁸

モズビーが Mitla にある墓地へやってきた場面。Tule の樹を見ての感想である。根茎と歴史、そして無意識。キリスト教徒の老女の礼拝する姿に real quality を認めた後、モズビーは Tule の樹の奥深くを覗き込む。

A world in itself! It could contain **communities**. In fact, if he recalled his Gerald Heard, there was supposed to be **a primal tree occupied by early ancestors, the human horde housed in such appealing, dappled, commodious, altogether beautiful organisms**. The facts seemed not to support this golden myth of an encompassing paradise. Earliest man probably ran about on the ground, horribly violent, killing everything. Still, this dream of

gentleness, this aspiration for arboreal peace was no small achievement for the descendants of so many killers. For his religion, this tree would do, thought Mosby. No church for him.*¹⁹

Tuleの樹、そしてその複雑な organism*²⁰は、家系図の樹形を表すと同時にモズビーの入り組んだ回想の構造を示している。木はそれ自体2つのイメージを持っている。ひとつは家系や歴史といったスタティックな装置としての樹木のイメージであり、今ひとつは大地に深く張り巡らされる細胞のように微小で差異的=微分的な根茎（リゾーム）のイメージである*²¹。communities, ancestors, descendantsといった語は前者の樹形図のイメージを想起させる。あのラストガーデンが守り通した家族であり、モズビーに欠落しているものである。だが、ひとつ前の引用の、樹の下で寝る犬の無意識は根茎状の無意識であり、モズビー自身の無意識の構造へと我々を促す。無意識の構造、即ち、無意識の差異化=微分化だ。ラカンはいみじくも、無意識は言語的だと言った*²²。だが、我々は一歩進んで、無意識は記憶と同様時間的であると言わなくてはならない。これはフロイトの理論と対立するものである。フロイトの無意識は心理的である。しかし、我々がこれまで見てきたのは、無意識とは純粹な記憶内容であり、持続の中で存在するものであり、多分に機械的であるということである（ガタリの機械状無意識*²³を思い出してほしい）。

この樹があれば宗教はいらないと豪語するモズビー。この樹と宗教の鎖列は何を指すのか。宗教、特にキリスト教はオイディプス的である。神が多ではなく一であるという点においてである。樹は、幹は通常オイディプス的専制国家の象徴として理解される。ところが、モズビーの意識の中の樹は、樹形図としての樹ではなく、根茎としての樹であり、樹

の細胞的なイメージ、即ち、差異的=微分的イメージなのだ。

厳密に言って、心理的なものは現在である。現在だけが《心理的》である。しかし、過去は純粹な存在論であり、純粹な記憶内容は存在論的意味作用しか持っていない*²⁴

意識は心理的であり、現在においてのみ人は意識できる。無意識は前述の通り機械的、存在論的であり、従って心理的ではない。意識が現在のみを問題とするものであるとすれば、無意識は人間の歴史的なもの、記憶と関わるものであり、持続の上に存在するものなのである。

6 無意識と死

...as a result the unconscious is differential and iterative by nature; it is serial, problematic and questioning.*²⁵

フロイトの欲動理論は生と死の弁証法であり、エロスとタナトスの二元論である。この意味で、「ある程度まで古いマニ教的世界観、善と悪のふたつの原理の終わりなき敵対という世界観をおもいおこさせる*²⁶」というボードリヤールの指摘は正しい。しかしながら、先のドゥルーズの言葉にもあるように、無意識は本質的に差異的=微分的であり、それを司る欲動も差異的=微分的である。我々はもはやヘーゲルの呪縛の所産たるフロイト理論に魅力を感じることはない。

実は、記憶はエロスに密接に関係している。

...Eros's force of repetition derives directly from a power of difference — one which Eros borrows from Mnemosyne, one which affects virtual objects like so many fragments of a pure past.*²⁷

この引用から我々が読み取るのは、エロスが時間と関連しており、またニーチェ的な「力」という存在論的価値を持っているということである。ニーチェにおいては人間の存在のみならず全ての存在は「力」の表現に他ならない。

...an odd and complex **fantasy**. It was that he was **dead**. He had **died**. He continued, however, to **live**. His **doom** was to **live** life to the end as Mosby. In the **fantasy**, he considered this his purgatory. And when had **death** occurred? In a collision years ago. He had thought it a near thing then. The cars were demolished. The **actual** Mosby was killed. But **another** Mosby was pulled from the car. A trooper asked, "You okey?"*²⁸

fantasyとactualityの対立。アクチュアルなモズビーの死と、回想、即ちここにおけるファンタズムはモズビー自身の自己愛ナルシシズムと深く関わっている。モズビーは本質的にナルシシストである。リビドーが外へ向かうのがエロスならば、ナルシシズムの生成はリビドーが内へ向かう、即ち自我へ逆行することにより起こる。ナルシシズムとはアクチュアルなものを偽装することであり、それと同時に潜在的なもの、即ち記憶を捨てる—中性化する—ということでもある。

A Lustgarten who didn't have to happen. But himself, Mosby, also a **separate creation**, a **finished product**, standing under the sun on large blocks of stone, on the stairs descending into this pit, he was **complete**. He had **completed** himself in this cogitating, **unlaughing**, **stone**, **iron**, **nonsensical**

form.*²⁹

ここに表現されたモズビーは「完結した」「中性的な」「非人間的な」存在である。この石のイメージは濡れた墓穴のイメージへと受け継がれていく。

Having disposed of all things **human**, he should have encountered **God**.

Would this occur?

But having so disposed, what **God** was there to encounter?

But they had now been led below, into the **tomb**. There was a heavy grille, the gate. The **stones** were **huge**. The vault was **close**. He was **oppressed**. He was afraid. It was very **damp**. On the elaborately **zigzag-carved** walls were thin, thin pipings of fluorescent light. Flat boxes of ground lime were here to absorb **moisture**. His heart was paralyzed.*³⁰

人間的なものを捨て去れば人は神に出会えるというのか。このモズビーの問いは、そのすぐ後のtombの中へ消されてゆく。このtombという言葉はしばしばwombと結び付けて論じられるのが欲動理論学者の習わしのようなのだ。この生と死の共存は、葛藤、即ちエロス／タナトスの二元論と誤解されやすいものである。確かに墓の中の描写、特にじめじめと湿ったジグザグの内壁はwombを連想させる。しかし、このtombはstoneのイメージ通り中性的であり、モズビーの中性性と絡めて論じなければならない。

ナルシシズムの生成はタナトスの生成でもある。「人間的なものを捨て去れば」とは中性になること、エスの生成ということだ。実は、エスは欲動をタナトスに変えるエネルギーを持つ。

エロスとは何か。それは存在が合一されるということである。それではタナトスとは何か。それは存在が分解されるということである。従ってモズビーは自己を中性化することによって、分解しようとするのであり、ナルシシストのモズビーはエスの生成のなかで欲動を死に向けるのである。

The death instinct does not enter into a cycle with Eros, but testifies to a completely different synthesis. It is by no means the complement or antagonist of Eros, nor in any sense symmetrical with him. The correlation between Eros and Mnemosyne is replaced by that between a narcissistic ego without memory, a great amnesiac, and a death instinct desexualised and without love.*³¹

生の本能とは記憶を持つということであり、

死の本能とは記憶を喪失するということである。モズビーはラストガーデンの回想で自己の回想を偽装しながら、実は記憶を抹消しようとしていた。彼は生きながらすでに死の本能と手を結んだナルシシストであり、Mitlaの遺跡と同様に「廃墟」であった。だが彼は全ての記憶を抹消し、エロスと手を切り、タナトスに身を任せるには余りに聡明すぎた。彼は自己の記憶を mescal 酒で歪めなくてはならないほど臆病であったからだ。

Stooping, he looked for daylight. Yes, it was there. The light was there. The grace of life still there.*³²

今一度、彼は死に向けられた欲動をエロスの側に回復しようとし、焦る。彼の最後の息苦しさは、記憶と死の狭間で苦しむナルシシストの足搔きに他ならないのである。

【注】

- * 1 Bellow, Saul, *Mosby's Memoirs and Other Stories*, Penguin, 1971, p.159.
- * 2 *ibid.*, pp.171-72.
- * 3 *ibid.*, p.162.
- * 4 アウフヘーベン (aufheben) というドイツ語には、(1)否定する、(2)高める、(3)保存する、という3つの意味がある。ヘーゲルがこの用語を用いる場合、それは「止揚」と訳されるが、一言で言えば「現在の事態を保存しつつ、否定し、高めること」という意味である。つまり、ヘーゲル主義における発展とは、全く新たな事態が登場することではなく、その前の事態が維持されながら、高次の段階へと引き上げられることを意味するのである。その意味で、ヘーゲル主義の「発展」はニーチェとは異なり、ダイナミックなものではなく極めて楽観的と言わざるを得ない。
- * 5 神が「能動的、肯定的な」力を持つとすれば、人間は「反動的」力を持たざるを得ない。それ故人間は否定的になれば、怨恨、疚しい良心、禁欲主義のどれかに陥ることになる。ニーチェのニヒリズムはこれらのいずれにも属さない、「反動的ではあるが肯定的な」力を表現するのが人間なのだとする。詳述はニーチェの代表的な著作『道徳の系譜』にあるが、これについてはドゥルーズの優れた解説が公にされている。Deleuze, Gilles, *Nietzsche et la philosophie*, Presses Universitaires de France, 1962. のとりわけ Chapitre IV. Du ressentiment à la mauvaise conscience (pp.127-168) を参照されたい。
- * 6 この哲学に関する「前提」の問題については、以下のドゥルーズの解説が示唆に富む。“The pure

self of 'I think' thus appears to be a beginning only because it has referred all its presuppositions back to the empirical self. Moreover, while Hegel criticized Descartes for this, he does not seem, for his part, to proceed otherwise: pure being, in turn, is a beginning only by virtue of referring all its presuppositions back to sensible, concrete, empirical being." (Deleuze, Gilles, *Difference and Repetition*, trans. Paul Patton, The Athlone Press, 1994, p.129.)

- * 7 *ibid.*, p.70.
- * 8 *ibid.*, p.82. 尚, 邦訳のジル・ドゥルーズ『差異と反復』(財津理訳, 河出書房新社, 1992年)では, exist (現実存在), insist (存続), consist (存立) という訳語が付けられている。これらの用語はそれぞれ ex-ist (外に立つ), in-sist (内に立つ), con-sist (共に立つ) のように分解して考えるとわかりやすい。「純粹過去」は「古い現在」のなかで存続しながら, 「新しい現実の現在」と共存するのである。
- * 9 ドゥルーズ『ベルクソンの哲学』宇波彰訳, 法政大学出版局, 1974年, p.51. 尚, 参考までに原文を示しておく。“La durée est essentiellement mémoire, conscience, liberté. Et elle est conscience et liberté, parce qu'elle est d'abord mémoire.” (Deleuze, Gilles, *le bergsonisme*, Presses Universitaires de France, 1966, p.45.)
- * 10 同上書, p.55. 又, 原文は p.49.
- * 11 Bellow, *op. cit.*, p.158. この引用にあるような二重構造は冒頭の小鳥のさえずりの説明にも見られる。“The birds chirped away. Fweet, Fweet, Bootchee-Fweet. Doing all the things naturalists say they do. Expressing abysmal depths of aggression, which only Man—Stupid Man—heard as innocence.” (*ibid.*, p.157)
- * 12 *ibid.*, p.165. “Mosby speaking of himself in the third person as Henry Adams had done in *The Education of Henry Adams*.”
- * 13 *ibid.*, pp.178-79.
- * 14 *ibid.*, p.184.
- * 15 *ibid.*, p.163. 尚, 引用文は, 「僕自身廃墟だ。」という意味。
- * 16 *ibid.*, p.179.
- * 17 mescal は, 一種のリウゼツランの発酵汁から蒸留してつくられるメキシコの酒のことを指すが, 一方, アメリカ, テキサス州又はメキシコ北部産のメスカルサポテン (*Lophophora williamsii* 又は *L.lewinii* のいずれか) を指すこともある。このメスカルサポテンからは, その花・茎・果実を乾燥させた, インディアンが興奮剤として用いる mescal buttons が採れ, この mescal buttons からは幻覚作用のある結晶アルカロイドの mescaline が得られる。ペローはこの意味での mescal を opiate に重ね合わせているものと推測される。
- * 18 Bellow, *op. cit.*, pp.180-81.
- * 19 *ibid.*, p.181.
- * 20 この organism は, やがてラストガーテンの妻, トルーディ (Trudy) の生殖器としての organism へと展開する。人体の細胞化, 即ち, 差異化=微分化である。“Since individuals are sometimes born from a twin impregnation, the **organism** carrying the undeveloped brother or sister in vestigial form—at times no more than an extra **organ**, a rudimentary eye buried in the leg, or a kidney or the beginnings of an ear somewhere in

the back—Mosby often thought that Trudy had a little sister inside her. And to him she was a clown.” (p.183)

- *21 この樹木と根茎の関係については次のパルネの説明を参照されたい。“Vous vous êtes mis à opposer le **rhizome** aux **arbres**. Et les **arbres**, ce n'est pas du tout une métaphore, c'est une image de la pensée, c'est un fonctionnement, c'est tout un appareil qu'on plante dans la pensée pour la faire aller droit et lui faire produire les fameuses idées justes. Il y a toutes sortes de caractères dans l'**arbre**...il est **machine binaire** ou **principe de dichotomie**, avec ses embranchements perpétuellement répartis et reproduits, ses points d'arborescence.....Panser, dans les choses, parmi les choses, c'est justement faire **rhizome**, et pas racine, *faire la ligne, et pas le point*. Faire population dans un désert, et pas espèces et genres dans une forêt. Peupler sans jamais spécifier.” (Gilles Deleuze et Claire Parnet, *Dialogues*, Flammarion, Paris, 1977, pp.33-34) リゾーム (=rhizome) はドゥルーズ／ガタリの作り上げた代表的概念の一つである。
- *22 ジャック・ラカン (Lacan, Jacques) の無意識における言語的構造については、『エクリ』を引き合いに出すまでもなく、例えば、「言語と無意識」折島正司訳 (『ラカン』現代思想臨時増刊号第9巻第8号, 青土社, 1981年) の特に pp.31-33が参考になる。
- *23 ガタリ (Félix Guattari) は1930年生まれ現代フランスの精神分析学者。1992年8月29日に死去した。享年62歳。彼はドゥルーズとの共同執筆にしばしば携わった。特に、『カフカ (*Kafka*, 1975)』『アンチ・オイディプス (*L'Anti-Œdipe*, 1972)』『ミル・プラトー (*Mille Plateaux*, 1980)』は有名であり、邦訳も出版されている。「共著」は著者であることをやめる一つの手段であり、彼らにとってそれは「共に、一緒に書く」ことではなく、「二人の狭間で書く」ことを意味した。尚、「機械状無意識」はガタリの代表作であり (*L'inconscient Machinique*, 1979), 邦訳も法政大学出版局から出版されている。
- *24 ドゥルーズ『ベルクソン』p.57. 尚、参考までに原文を付しておく。“En toute rigueur, le psychologique, c'est le présent. Seul le présent est 《psychologique》; mais le passé, c'est l'ontologie pure, le souvenir pur n'a de signification qu'ontologique.” (Deleuze, *bergsonisme*, p.51)
- *25 Deleuze, *Difference and Repetition*, p.108.
- *26 ボードリヤール (Baudrillard, Jean)『象徴交換と死』今村仁司・塚原史訳, 筑摩書房, p.352.
- *27 Deleuze, *Difference and Repetition*, p.109. ドゥルーズは *force* と *puissance* を、それぞれ「勢力・力」「常に単数で抽象的な力」というように、「力」という語を厳密に使い分けている。ところが引用されている英訳では、この *puissance* を *power* と訳している。*power* は「権力」という意味でも用いられるが、ニーチェ思想については「権力」を概念としての「力」に用いると誤解を生じやすい。ちなみに財津理はこの引用の箇所の *force* を「動力」*puissance* を「力」と訳している。
- *28 Bellow, *op. cit.*, p.182.
- *29 *ibid.*, p.184.
- *30 *ibid.*, p.184.
- *31 Deleuze, *Difference and Repetition*, p.111. 尚、引用文中の *Mnemosyne* (ムネモシユネ)

とはギリシャ神話における記憶の女神である。

*32 Bellow, *op. cit.*, p.184.

The Unconscious and Memory

— Saul Bellow's "Mosby's Memoirs" —

Nobumoto IRIE

(Received October 12, 1995)

ABSTRACT

Our intention in this thesis is to examine the function of memory. This story consists of the mixture of Mosby's past memoirs and present discourses. The distortion of his discourses due to his intoxication with mescal wine is Bellow's strategy to tie the present to past memoirs, and it is the key to examine the problem of memory. The present to pass, that is to say the past, originates in the present. Memory cannot be identified with the past as 'the present to pass', but constitutes the being of the pure past. It is the representation of the former present in the present one. In this sense, memory is temporal, neither spatial nor psychological. Turning our eyes to "the unconscious", we can read from Mosby's discourses concerning Mitla narcissism and death instinct. Mosby disguises his own memoirs with Lustgarten's ones. In fact he attempted to omit his memory. Eros means the instinct that directs life toward the outer world; on the other hand, narcissism is the instinct that directs life toward the inner self. In this sense, Mosby, a narcissist, essentially allies himself to death instinct, which is represented by the image of the cemetery of Mitla.

KEY WORDS

Time and memory, The pure past, The unconscious, Trees and the rhizome, Narcissism and death